

聖書：マルコの福音書 6：14～30

説教題：ヘロデはこれを聞いて

日時：2025年10月5日（朝拝）

今日の箇所は「さて、イエスの名が知れ渡ったので」と始まります。これは明らかに前の箇所とのつながりを示しています。前回イエス様は初めて12使徒たちを宣教に遣わしました。それまではイエス様のそばで学ぶだけの状態であった彼らでしたが、いよいよ宣教に遣わされ始める時が来たのです。彼らは二人一組で遣わされ、主の代理人として、神の国の大使としての働きをしました。その結果、イエス様の名が知れ渡り、ヘロデ王の耳にも届くことになったのです。

まず人々の反応が記されています。ある人々は「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ」と言っていました。「ヨハネは奇跡を行っていたのか？」と疑問に思う人もいるかもしれませんが、確かに聖書にはヨハネが奇跡を行ったという記録は見当たりません。しかし人々は、ヨハネは以前、奇跡をしていたと言っているわけではなく、「死人の中からよみがえったからこそ、彼は以前より力を増して、あのような不思議な働きをしているのだ」と理解していたのでしょう。また他の人々は「彼はエリヤだ」と言っていました。ご存知の通り、エリヤは死ぬことなく天にあげられたと記されている預言者です。その彼が終末に現れて偉大な働きをするという信仰や期待がユダヤ人の中にはありました。そのエリヤが今現れたのだと考える人たちもいたのです。さらに別の人々は「昔の預言者たちの一人のような預言者だ」と言っていました。特定の誰かではないけれども、かつてイスラエルに現れた偉大な預言者に続く人物だとイエス様のことを見ていたのです。

こうして人々は様々な推測をしていましたが、ヘロデにはただ一つの確信がありました。それは「あれはヨハネだ！」というものです。「私が首をはねた、あのヨハネがよみがえったのだ！」と。ここで私たちは初めてヨハネが斬首されていたことを知らされます。彼が捕らえられたことはすでに1章14節に記されていましたが、実はこのヘロデによって殺されていたのです。そしてヘロデは今、イエス様についての噂を耳にしながら、「あれはヨハネのよみがえりに違いない、いや、きっとそうだ！」と確信していました。彼の良心が、そう告げたのです。言い換えれば、自分がヨハネにし

てしまったことに対する良心の呵責、心のうずきを彼は抱いていたのです。では、ヘロデはどのようにしてヨハネに手をかけたのか。その経緯が、このあと回想という形で記されて行きます。

17 節にある通り、ヘロデは以前、人を遣わしてヨハネを捕らえ、牢につないでいました。それはヨハネが彼の罪を糾弾し続けたからです。「あなたが兄弟の妻を自分のものにするのは、律法にかなっていない！」と。このヘロデはかつて隣国ナバテヤのアレタ王の娘と結婚していましたが、兄弟ピリポの妻ヘロディアを気に入り、彼女と結婚するために離婚しました。これは実質的に姦淫であり、またレビ記 18 章 16 節や 20 章 21 節にあるように、兄弟の妻をめとることは律法に反することでした。ヨハネはこれを看過しません。18 節に「言い続けた」とあるように、彼は 1 度だけではなく、繰り返しこの罪を責め続けました。そんなヨハネはヘロディアにとって邪魔でした。彼女は彼を殺したいと思っていました。ところがヘロデの態度は違っていました。20 節に、彼は「ヨハネが正しい聖なる人だと知っていた」とあります。つまり彼はヨハネに対してある種の恐れと敬意を抱いていたのです。そのため、彼を殺すことは望まざり、むしろ保護していました。もちろん自分の罪が責められることは不快であり、ヨハネの教えを聞いて彼は当惑していました。それでも彼の語ることは正しいという良心の声がヘロデの中にはまだ生きていたのです。自分は罪を犯しているが、ヨハネの言葉は正しい——その正しさに心のどこかで惹かれていたのです。真理を喜ぶ心、真理に対する憧れのようなものが彼には確かにあったのです。

しかし、そんな彼に思いもかけない形で決断を迫られる時がやって来ます。ヘロデは自分の誕生日に重臣や千人隊長、ガリラヤのおもだった人たちを招いて、祝宴を設けました。その時、ヘロディアの娘が入って来て踊りをし、人々を喜ばせました。上機嫌になったヘロデは彼女に言います。「何でも欲しい物を求めなさい」「おまえが願う物なら、私の国の半分でも与えよう」と。少女は母のもとへ行って相談します。するとヘロディアはこの機を逃さず、「バプテスマのヨハネの首」を願い出るようにと指示します。少女は王のもとへ戻り、こう告げます。「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と。さてヘロデはどうしたのでしょうか。彼は本来ヨハネを殺したくなかったのです。だからこそこれまで保護していました。しかしこの場で誓いを破れば面目が立ちません。彼の誓いは多くの人が聞いていました。そこでヘロデは内心では尊敬すらしていたヨハネの命よりも自分のプライドまた

体面を優先したのです。自分を守るためにヨハネをあっけなく見殺しにしたのです。こうしてヨハネは殺され、その首は盆に載せられ、少女のもとに運ばれます。そして彼女はそれを母ヘロディアに渡しました。旧約聖書に登場するあの悪女イゼベルの姿が重なります。最後にヨハネの遺体は弟子たちによって引き取られ、墓に収められたと記されています。

このヨハネの運命についての意味は後ほど触れますが、まず私たちはヘロデの生き方から一つの警告を受け取ることができます。彼は見て来た通り、真理への関心、あるいはそれに対する憧れのような思いを持っていました。だからこそ長い間ヨハネを殺さず、当惑しながらも彼の教えを喜んで聞いていました。しかし彼は聞くだけでした。その教えに従うことを先延ばしにし続けていました。その結果、思いもよらない時に不本意な決断を迫られる日が来てしまったのです。殺したくないと思っていたヨハネを自らの手で殺すことになったのです。その日は突然やって来たのです。これは主に従わないでいると、ついにはこういう日がやって来るという警告です。また今度、また別の日に決断すればいいと思っていると、そのチャンスはなくなってしまうのです。そればかりか自分が願ってはいなかった不本意な方向へと自分の人生は進んでしまうのです。今日の箇所では、まだヘロデの良心は機能していました。しかし後の彼はどうだったでしょう。ヘロデはルカの福音書 23 章 8～11 節に再び登場します。23 章 8 節にこうあります。「ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思い、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。」しかしそこでの彼には以前にあったような恐れや敬いが見られません。11 節に「自分の兵士たちと一緒にイエスを侮辱したり、からかったりし」、また「はでな衣を着せ」と記されています。良心の声に耳を貸さず、それに蓋をしていると、ついに良心が機能しない状態になってしまうのです。そして最もここで深刻なことは、そんなヘロデがイエス様に問いかけても、イエス様は一言も答えられなかったことです (9 節)。イエス様から何も語ってもらえないこと、これはイコール、その人にはもう救いがないということです。ただ一人の救い主がもう関わってくださらないのです。ヘロデは御言葉を聞いても応答せず、良心の声に蓋をして生き続けた結果、こうして自らを救いから締め出すこととなったのです。私たちは、いつまでも神の語りかけを聞けると思っていてはいけません。御言葉を聞く機会、また御言葉に従う機会は永遠にあるのではないのです。まだ主の声に耳を傾けられる今の内に素直に従う歩みを始めるように、とここから強く教えられるのです。

さて今日は 30 節まで読んでいただきました。イエス様によって宣教へと派遣された弟子たちは、ここでイエス様のもとへ戻って来て報告をします。これで一つのまとまりが完成します。そして、この弟子たちの派遣と帰還報告の間にバプテスマのヨハネの殉教の記事が挟み込まれています。いわゆるサンドイッチ構造です。この視点に立つ時に、なぜここにヨハネの話が組み込まれているのか、その意図（メッセージ）が見えて来ます。

まず見えて来ることは、これは主に従う者が払うべき代償について語っているということです。6 章 1~4 節ではイエス様が故郷ナザレで拒絶されたことが記されています。続く 7~13 節では弟子たちが宣教に派遣される際、人々から拒絶されることがあるということが 11 節で警告されました。そして遣わされた彼らがイエス様のもとに戻って来るまでの間に、ヨハネの殉教の記事が記されています。つまりこのヨハネが歩んだ道は、主に従う者に当然予期される道であるということを述べているものではないでしょうか。ヨハネが殉教したのは、たまたま不運だったからではありません。彼はイエス様の先駆者として来たるべきメシアを人々に指し示し、その心を整える働きをしました。そして彼は言葉だけではなく、自分の生き方そのものによっても主を指し示したのです。ヨハネは悔い改めを宣べ伝えました。その言葉を快く思わない世の力に拒絶され、命を奪われました。イエス様も同じです。イエス様も悔い改めの福音を伝えます。それを快く思わない人たちが反発し、やがてイエス様を拒み、ついには十字架上で葬り去ろうとします。ヨハネの暴力的死、辱めを受けた死は、やがてイエス様ご自身が受ける究極的な暴力的死、辱めの死を予告するものです。またヨハネの弟子たちが遺体を引き取り、墓に葬った記述は、後にアリマタヤのヨセフがイエス様の遺体を引き取って葬った場面を彷彿とさせます。つまりヨハネはこうしてまさに見事にメシアの先駆者としての務めを果たしたのです。しかしこれはヨハネだけの話ではありません。またイエス様だけの話でもありません。これは主によって遣わされる私たちの前にも備えられている道であることを告げるために、ヨハネ殉教の記事はここに置かれているのではないのでしょうか。実際イエス様は後に 8 章 34~35 節でこう語られます。「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」 この世の命を救おうとする人はまことの命・永遠の命を失うことになります。しかし、主と福音

のためにこの世の命を失うことも厭わない人は、やがてまことの命・永遠の命を得ます。私たちの前にあるのもイエス様が故郷ナザレの人々から受けたような、またバプテスマのヨハネが受けたような、そのような道です。主に従う弟子として、私たちもその覚悟をもって歩む者でなければならない——そのことを今日の箇所は私たちに教えています。

しかし今日の記事はただ暗いだけではありません。この苦難のただ中にも勝利の兆しがあります。暗雲の中にも確かに希望の光があります。二つの点に注目したいと思います。一つ目はヘロデはヨハネを葬り、神の国のメッセージを沈黙させたつもりでいましたが、そうは行かなかった——むしろ神の国は前進しているということです。ヘロデはヨハネを消しましたが、ここに別の働き手が現れています。12人使徒が遣わされています。その彼らの働きによってヘロデの耳に再び神の国のメッセージが届いた。これが今日の箇所が述べていることです。つまり神の国のメッセージは沈黙させられないということです。たとえ重要な一人が倒されたとしても、神は次の者を起こしてくださる。神の国は世の権力、世の力に封じ込められたままであることはありません。消したと思っても、また現れて来るのです。むしろかえって盛り返して来るのです。こうして神の国は前進するのです。

そしてもう一つは神の国は再び現れるだけでなく、最終的な勝利を得るということです。改めて16節のヘロデの言葉に注目しましょう。彼はこう言いました。「私为首をはねた、あのヨハネがよみがえったのだ！」ヨハネは確かに死にました。自分が殺しました。なのに、その彼がよみがえって来た！という感覚がヘロデの中にあっただのです。つまり彼は勝ったと思っていたが勝てていなかった！ということです。私は彼に手を下したが、最終的に勝利するのはヨハネかもしれない！そのように彼は自らの敗北を直感して、内心おびえたのです。そしてその彼の直感は正しかったのです。

ヨハネはイエス様の先駆者としてイエス様の歩みの型となり、イエス様はその通り、世から捨てられ、十字架にかけられ、殺されました。それですべてが終わったかのように思われました。しかし、そうではありませんでした！神はイエス様を三日目に復活させ、この世の勝利者と敗北者をひっくり返されたのです。それを逆転させられたのです。真の勝利は神の国の側に立つ者、イエス・キリストに従って歩む者たちにもたらされることを明らかにされたのです。

バプテスマのヨハネは主の弟子の歩みには拒絶と苦難が伴うことを、自らの身をもって示しました。それはイエス様が後に歩まれる道であり、また主に従う私たちの道でもあります。私たち一人一人にも主に従う者としての負うべき十字架の道が備えられていることでしょう。しかし、その道はただ苦難だけの道ではありません。それは必ず栄光に至る道、最後に勝利に至る道なのです。

私たちも主の弟子としての歩みには、ヨハネやイエス様にならう苦難があることを覚えつつ、主が召してくださる道を、主への感謝と愛を告白して従って行く者でありたいと思います。そしてたとえ世の目には一見敗北のように見えても、必ず勝利と栄光へと至るこの幸いな道、真の祝福の道を進む者たちへと励まされ、強められて行きたいと思います。